

H30年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金
(慢性の痛み政策研究事業)
慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究
分担研究報告書

レジストリー構築に関する研究

研究分担者 今村 佳樹 日本大学歯学部口腔診断学講座 教授

研究要旨

慢性の口腔顔面痛は、全身の慢性痛の中でも頭部に局在することから、四肢体幹の痛みとは特徴を異にする慢性疼痛である。本研究における当該分担者の役割は、全身の慢性痛における口腔顔面痛の特徴を明らかにし、レジストリー構築に向けた基礎データの解析を行うことにある。

A．研究目的

Web 調査により、慢性の口腔顔面痛を有する対象者をスクリーニングし、その有病率を調べる。また、口腔顔面領域の慢性痛で特徴的なバーニングマウス症候群(BMS)患者に対し、その病態生理学的特徴を探る。

B．研究方法

楽天インサイトに事前に登録した各年齢層の男女を対象に匿名でアンケートに協力してもらい、疼痛発症から6か月以上経過、Neumerical Rating Score (NRS)5以上、PDAS40以上の人の割合を検索する。一方、BMS症候群について、過去の論文を参考に批判的総説論文をまとめる。

C．研究結果

Web 調査回答者男女各18000人(男性アンケート回収率92.2%)を対象に上記慢性口腔顔面痛の診断基準に該当する対象者は、2.71%であった。この値は、過去の四肢体幹、あるいは頭痛、頭頸部の慢性痛の報告にも匹敵するものである。ただし、PDAS40以上の症例に関しては、口腔顔面痛単独を訴える患者ではほとんど見られなかった。

D．考察

中等度の疼痛強度の慢性口腔顔面痛を訴える患者の割合は、四肢体幹と比べても低くなかった。一方、PDASは四肢の運動障害を評価する尺度であり、口腔領域の慢性痛の評価に

は適していないと考えられた。BMSについては、閉経後の鼓索神経の萎縮とその後の三叉神経の神経支配の変容が病態に深くかかわっていることが示唆された。

E．結論

Web 調査により、慢性の口腔顔面痛に関する疫学調査の結果が明らかになった。従前明らかでなかった口腔領域の慢性痛の罹患率が判明し、その値は、四肢体幹の有病率と比べても大きな差異は見られなかった。一方、機能障害に関しては、四肢体幹の機能障害を調べる尺度は口腔領域には適用できないものだった。口腔領域で評価しうる尺度を検討する必要がある。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G．研究発表

1. 論文発表

- 1) Imamura Y, Shinozaki T, Okada-Ogawa A, Noma N, Shinoda M, Iwata K, Wada A, Abe O, Wang K, Svensson P. An updated review on pathophysiology and management of burning mouth syndrome with endocrinological, psychological and neuropathic perspectives. J Oral Rehabil. 2019. DOI:10.1111/joor.12795.

2. 学会発表

- 2) Imamura Y. Burning Mouth Syndrome: Is it a neuropathic condition? (English)
Symposium I. The 66th Annual Meeting of Japanese Association for Dental Research. 2018.11.17, Sapporo

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし